

## 仙台国際音楽コンクールニュースレター

### 第6回仙台国際音楽コンクール 【2016年開催決定!!】

#### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 東京公演 リチャード・リン ヴァイオリン・リサイタル演奏評

奥田 佳道 (音楽評論家)



独特の甘みをたたえた中低音が、浜離宮朝日ホール空間を満たす。旋律美に寄り添う天性の資質と聴くことも、あるいはカーティス音楽院の名伯楽アーロン・ロザンドから会得したであろう、古き佳き時代の響きと捉えることも可能だ。台南の奇美文化基金会／奇美博物館 (Chimei Museum) から貸与されているクレモナの銘器ジュゼッペ (ヨーゼフ)・ガアルネリ・デル・ジェス Lafont-Siskovsky も、この若く才能あるヴァイオリニストの演奏に、好ましい彩りを添えているようである。

仙台国際音楽コンクール優勝者による恒例のリサイタル。第5回同コンクール〈ヴァイオリン部門〉の本選でブラームスの協奏曲を弾き、栄誉に輝いた台湾育ちのリチャード・リン (林品任) が、弟のピアニスト、ロバート・リン (林品安) とブラームスの逸品「ヴァイオリン・ソナタ」全3曲——第1番ト長調作品78「雨の歌」、第2番イ長

調作品100、第3番ニ短調作品108——を、作曲順に披露した。

ジュリアード音楽院の修士課程でルイス・カプランに学び、鮮やかな技に磨きかけた今どきのアーティストの一人だが、リチャード・リンは、私が私ごと主観を振りかざさない。豪胆な歌いまわしを武器に、楽想を直線的に、開放的に、劇的に弾く若手の演奏家に喝采が集まりやすい——それはそれで若さの特権でもある——が、彼は勢いに任せたヴァイオリンを弾かない。誠実な姿勢で作品に臨み、楽想の句読点を独自の視座で意識し、響きを丁寧に紡いでゆく。一言で申せば思索と実践の人だ。しかもそこに得も言われぬ歌心がある。

ただ今回は、ブラームスの「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」である。音符を慈しむ、ひたむきな演奏に拍手を送りつつ、兄弟ともに大器を感じさせるだけに、課題を少し述べさせていただく。

まずはロバート・リンのピアノだ。

いま、あえて「ピアノとヴァイオリンのための」と、楽曲本来のタイトルを記したが、ドイツ・ロマン派の二重奏ソナタという観点から見ると、ロバートのピアノは、兄リチャードの詩的な音色 (ねいろ) を壊さないように、という配慮なのだろうが、客席に届く音は、ヴォリューム感や響きの色合いを含めてソフトに過ぎる。

人柄を映し出す知的なピアノで、サロンなどをイメージした親和的な語り口を目指した、あるいはヴァイオリンに尽くす名脇役を演じたのかも知れない。それ自体は素敵なのだが、彼らが挑んだのは緻密な筆致、有機的な構成を誇るブラームスの二重奏ソナタである。兄のヴァイオリンに寄り添うだけでなく、音楽を積極的に、誤解を恐れずに申せば交響的に導く場面が欲しかったことを告白しておく。好演ゆえの欲である。

ブラームスの音楽と相愛というリチャード・リンは、滋味も巧緻性も美質となる3曲のソナタの個性を際立たせるというよりも、持ち前の落ち着いた音色を生かし、ひとまとまりの世界を描く。響きは全般に吟味され、表層的には過不足を感じさせない。前述のように中低音域には、温もり、広がり、いや色気さえある。調べの環を愛でる、昨今貴重なヴァイオリンだが、フレーズの多様な「幅」をさらに意識する必要はあるだろう。聡明な彼は次なる高みに進むにはどんな語法が必要か、分かっているはずだ。リサイタル後に仙台で録音されたブラームスのソナタ3曲、さらに今後予定されているバルトーク、サン＝サーンスの協奏曲で、彼は進化し、先日以上に多彩な音色を紡いでいるのでは。

優れた才能を見出し、発信する。ファンとの交歓の場を設ける。公演や録音を通じて育む——仙台国際音楽コンクールの理念は変わっていない。リンは恵まれ、皆に愛されている。

ソナタの緊張感をほぐすアンコールが3曲。映画「セント・オブ・ウーマン／夢の香り」にも挿入されたカルロス・ガルデル (1890~1935) の名タンゴ「首の差で Por una cabeza」 (ジョン・ウィリアムズ編曲) に、リチャード・リンとロバート・リン兄弟の別の息づかい、洗練されたエンターテインメントへの適性が垣間見え、これは抜群に楽しかった。

#### \* 公演概要 \*

#### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念リサイタル 東京公演

リチャード・リン ヴァイオリンリサイタル

日時：2014年6月19日 (木) 19:00開演

会場：浜離宮朝日ホール (東京都中央区築地5-3-2)

プログラム:

- ・ブラームス／ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 op.78
- ・ブラームス／ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 op.100
- ・ブラームス／ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 op.108

アンコール

- ・花は咲く／菅野よう子作曲／辻井伸行編曲
- ・タンゴ (ポルウナカペーサ)／カルロス・ガルデル作曲  
／ジョン・ウィリアムズ編曲
- ・愛燦燦／小椋佳作曲／玉木宏樹編曲

【ピアノ：ロバート・リン】

## 第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 東京公演 リチャード・リン ヴァイオリン・リサイタル演奏評

林田 直樹 (音楽ジャーナリスト・評論家)

2013年の第5回仙台国際音楽コンクールで優勝したヴァイオリニスト、リチャード・リン (林品任) が、弟のピアニスト、ロバート・リン (林品安) とデュオを組んだ、優勝記念演奏会の東京公演を聴いた (2014年6月19日、浜離宮朝日ホール)。

プログラムは、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ全3曲。コンクール優勝時のファイナルでの演奏曲がブラームスのヴァイオリン協奏曲だったことに因んでいるとのこと。

まず、第一に感じたのは、天性の音色の美しさ、そしてすべてのフレーズにこめられた歌である。それが最も生かされるのがブラームスなのだろう。彼自身も「大好きな作曲家」だというのは、そのあたりの相性が判っているからなのかもしれない。

前半の第1番「雨の歌」と第2番では、澄み切った青空のような純度の高い音色で、丹念に歌う。この音色は本当にかけがえがない。次の楽音に向かうときにほんのり漂う色気もいい。急がず慌てず、腰を据えての、この「丁寧な歌」のセンスの良さが、リチャード・リンの持ち味である。

聴き進めるにつれて伝わってきたのは、ブラームスという作曲家に対して彼が抱いている限りない愛情である。そしてその態度は常にみずみずしく清潔である。ロマンティックで共感性に満ちた体質なのだが、その根底には誠実さがある。自己顕示的な嫌みがまったくない。

ブラームスという作曲家の古典性ゆえか、一定の枠内の音量をはみ出すことのない骨太な演奏でもあったが、たとえば、一つの楽章の中で、もう一段ぐっと沈み込むような極端なピアノシモを見せたり、遠近法的な俯瞰や構成感をさらに加えたら、一体どうなっていたらうか。

休憩をはさんだ後の第3番は、前半に若干あった硬さもほぐれて自由になり、もっとも情熱的で優れた、本領発揮の演奏となった。一つ一つの音の内側にこもる熱いロマンの炎があった。それは、この第3番を偉大な作品たらしめる最大の要因のひとつでもある。



アンコールの「花は咲く」や「愛燦燦」では、リン自身の歌もまじえ、会場の雰囲気は一気になごんだものとなった。ここでも「歌」をヴァイオリンで奏するという本質が良く表れていた。そして感じたのは、彼が、友愛の人であるということ。かつてフリッツ・クライスラーが備えていたであろう、人間の善良さへの信頼を、それは彷彿とさせた。

現代人が何かと求められがちな、競争して勝負に勝つ、ということと、リチャード・リンの音楽の本質は違う。ただ自分の芸を披露するのではなく、喜びを持って自分を作品に捧げつくし、人と人を芸術によって結び付け、聴衆に奉仕したいというひたむきな欲求がある。そこは彼を今後かけがえのない演奏家たらしめる最大の可能性だろう。

最後にひとつ、個人的に驚いたエピソードを補足しておこう。それはアンコールの「愛燦燦」を弾き始めたとき、その音色が明らかに、中国の民族楽器「二胡」を思わせるものとなっていたことである。無意識のうちにそうってしまったのか、それとも意図的にそうしたのか? 1733年製ガールネリ・デル・ジェスの名器「ラフォン」を用いて、あれほど美しい音色で歌うことにこだわっていたリンのことであるから、後者かもしれない。戦後日本を代表する歌手・美空ひばりの名曲を、あえて中国的な音色で演奏することによって、彼は日本と中国との精神的なつながりを音楽的に演出してくれたのではないだろうか。台湾とアメリカという二つの祖国を持つ彼が、いま不安な状況にあるアジア諸国の友好にとっての、未来の懸け橋になってくれることを願わずにはいられない。

### リチャード・リン出演公演情報

#### 東京交響楽団第625回 定期演奏会

日時: 2014年11月8日(土) 18:00 開演  
会場: サントリーホール  
料金: S席 ¥7,000 A席 ¥6,000 ほか  
お問合せ: TOKYO SYMPHONY チケットセンター  
044-520-1511

#### 東京交響楽団第86回新潟定期演奏会

日時: 2014年11月9日(日) 17:00 開演  
会場: リゅーとびあ (新潟市民芸術文化会館)  
料金: S席 ¥7,000 A席 ¥6,000 ほか  
お問合せ: リゅーとびあ チケット専用ダイヤル  
025-224-5521

指揮: 飯森範親  
演奏曲:  
バルトーク: ヴァイオリン協奏曲 第2番  
ベルリオーズ: 幻想交響曲 作品14



【FOCD9612】

### 第5回仙台国際音楽コンクール優勝者公式記念CD

二人の優勝者のコンクールでの演奏を収録した公式記念CDが発売されました。

#### リチャード・リン (ヴァイオリン部門優勝)

・収録曲:  
ベートーヴェン: ロマンスト 長調 op.40  
バルトーク: ヴァイオリン協奏曲 第1番 Sz36  
ブラームス: ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.77

#### ソヌ・イエゴン (ピアノ部門優勝)

・収録曲:  
モーツァルト: ピアノ協奏曲 八長調 K467  
ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30

・指揮: パスカール・ヴェロ  
・管弦楽: 仙台フィルハーモニー管弦楽団  
・価格: 各2,400円 (税別)  
・発売元: 株式会社フォンテック  
・制作: 公益財団法人仙台市市民文化事業団



【FOCD9613】